

## 4 果 樹

項 目	作 業 内 容
<p>(1) 水管理</p>	<p>(今月の作業のポイント)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○水管理</li> <li>○かんきつ類の摘果</li> <li>○台風対策</li> <li>○病虫害防除</li> </ul> <p>1 か月予報では、平年に比べ晴れの日が多く、気温がかなり高くなる（令和6年7月25日高松地方気象台発表）。無理をせず体調管理に気を付けながら作業を進める。</p> <p>気温が高く降水量が少ない8月のかん水は、樹勢維持や果実の肥大促進のために重要であるが、品質への影響も大きいため、園地や樹の状態に応じて適切に行うよう心がける。</p> <p>ア うんしゅうみかん</p> <p>8月は果汁の糖含量が増加し、酸含量は減少し始める時期であり、この時期の土壌乾燥は糖含量を高めるのに有効である。しかし、極度に乾燥させると、酸高や樹勢低下を招くため、葉の巻き具合（葉の下垂や巻きが朝になっても戻らない）等を見ながら、7日間隔で10～20 mm（10～20 t / 10 a）程度のかん水を行う。</p> <p>イ 中晩柑類</p> <p>大玉果生産の必要な中晩柑類は、果実肥大促進のために、7～10日間隔で20～30 mm（20～30 t / 10 a）程度を目安にかん水する。特に乾燥で酸高となりやすい「ぽんかん」、「不知火」及び裂果が心配される「甘平」は土壌が乾き過ぎないように心がける。</p> <p>ウ キウイフルーツ</p> <p>キウイフルーツの葉は蒸散量を調節する能力が劣り、また他の果樹に比べて蒸散量が多いため乾燥に弱い。このため乾燥は葉の萎れや葉焼けの原因となり、ひどい場合には落葉を起し、樹勢や果実肥大にも影響する。</p> <div data-bbox="922 1570 1369 1928" data-label="Image"> </div> <p>写真1 敷きわらによる被覆</p> <p>土壌の乾燥状態や葉の萎凋などの生育状況を観察しながら、3～5日間隔で20～30 mm（20～30 t / 10 a）程度かん水を行う。</p>

項 目	作 業 内 容																																		
<p>(2)かんきつ類の摘果</p>	<p>また、敷わら、敷草を行い、土壌中の水分の蒸散防止を図る。</p> <p>エ かき</p> <p>8月に土壌が乾燥すると、果実肥大が劣り、収量に影響する。また、乾燥後の降雨で急激に土壌水分が変化すると、短期間に果実が肥大するため、ヘタスキ果の発生や、後期落果を招きやすい。そのため、7日間隔で20～30 mm (20～30 t /10 a) 程度のかん水を行う。</p> <p>ア うんしゅうみかん</p> <p>着果量の多い樹では内成り果や裾成り果、小玉果、傷果などを摘果する。着果量の少ない樹では、9月以降に仕上げ摘果を行う。あら摘果を行っていない樹では、着果負担による樹勢低下と来年の着果を考え、8月上旬までに葉の枚数15枚に1果程度に間引く必要がある。</p> <p>極早生うんしゅうみかんについては、8月中旬から仕上げ摘果を行う。上向きの大玉果や日焼け果、小玉果、傷果などを除去し、葉の枚数20～25枚に果実1果を目安に、できるだけ下垂した果実を残す。</p>																																		
	<p>イ 中晩柑類</p> <p>8月が高湿少雨となると、着果量の多い樹では乾燥ストレスがかかりやすいことから、樹勢が低下して葉巻や旧葉の落葉、果実の軟化が発生しやすくなる。そのため高湿少雨が続く場合は、樹の状況に応じて早急に仕上げ摘果を行い、果実肥大の促進や樹勢の維持を図る必要がある。</p> <p>仕上げ摘果では、あら摘果で見落とした直果、日焼け果、果梗枝の太い極大果、傷果、奇形果などを除き、果実肥大の促進や収穫時の商品果率の向上を図る。</p> <p>表1 中晩柑類の仕上げ摘果の目安</p> <table border="1" data-bbox="810 1182 1385 1832"> <thead> <tr> <th rowspan="2">品 種</th> <th colspan="2">仕上げ摘果</th> </tr> <tr> <th>開始時期</th> <th>葉果比</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>いよかん</td> <td>8月下旬～</td> <td>80～100</td> </tr> <tr> <td>不知火</td> <td>8月中旬～</td> <td>100～120</td> </tr> <tr> <td>ぼんかん</td> <td>9月上旬～</td> <td>100～120</td> </tr> <tr> <td>清見</td> <td>8月中旬～</td> <td>80～120</td> </tr> <tr> <td>せとか</td> <td>8月中旬～</td> <td>80～100</td> </tr> <tr> <td>はれひめ</td> <td>9月中旬～</td> <td>60～70</td> </tr> <tr> <td>愛媛果試第28号</td> <td>8月中旬～</td> <td>100程度</td> </tr> <tr> <td>甘平</td> <td>8月上旬～</td> <td>80程度</td> </tr> <tr> <td>愛媛果試第48号</td> <td>8月中旬～</td> <td>80程度</td> </tr> <tr> <td>カラ</td> <td>9月上旬～</td> <td>30～40</td> </tr> </tbody> </table>	品 種	仕上げ摘果		開始時期	葉果比	いよかん	8月下旬～	80～100	不知火	8月中旬～	100～120	ぼんかん	9月上旬～	100～120	清見	8月中旬～	80～120	せとか	8月中旬～	80～100	はれひめ	9月中旬～	60～70	愛媛果試第28号	8月中旬～	100程度	甘平	8月上旬～	80程度	愛媛果試第48号	8月中旬～	80程度	カラ	9月上旬～
品 種	仕上げ摘果																																		
	開始時期	葉果比																																	
いよかん	8月下旬～	80～100																																	
不知火	8月中旬～	100～120																																	
ぼんかん	9月上旬～	100～120																																	
清見	8月中旬～	80～120																																	
せとか	8月中旬～	80～100																																	
はれひめ	9月中旬～	60～70																																	
愛媛果試第28号	8月中旬～	100程度																																	
甘平	8月上旬～	80程度																																	
愛媛果試第48号	8月中旬～	80程度																																	
カラ	9月上旬～	30～40																																	

項 目	作 業 内 容
(3) 台風対策	<p>8月は台風の襲来が多くなる時期であるため、事前対策を十分に行って被害を最小限とし、被害があった場合は、その状況に応じて事後対策をしっかりと行う必要がある。</p> <p>ア 事前対策</p> <p>(ア) 防風垣、防風ネット、排水路の点検・整備</p> <p>(イ) ハウスや棚等の施設やマルチの補強</p> <p>(ウ) 風による倒伏や枝折れを防止するための苗木や高接ぎ樹の支柱立て</p> <p>イ 事後対策</p> <p>暴風に伴い、潮風害の恐れがある場合は、早急（6時間以内）に樹体へのかん水（2～4 t/10 a）を行い、塩分を洗い流す。</p>
(4) 病害虫防除	<p>ア 共通</p> <p>(ア) カメムシ</p> <p>春先からカメムシの異常発生が続いており、県では7月19日に警報を発出して注意を呼び掛けている。通常であれば7月末ごろまでには発生数は減少するが、本年は餌となるヒノキ球果が極めて少ないため、園地への飛来が継続することが予想される。</p> <p>園内に飛来を確認すれば、地域の防除暦に従って薬剤を散布する。果樹カメムシ類は主に夕方から夜間にかけて加害するので、薬剤散布は夕方に行うと効果的である。飛来が長期間続く場合は、継続的な防除が必要となるが、連続して防除を行うと、ハダニ類やカイガラムシ類の異常増殖（リサージェンス）を引き起こす恐れがあるので注意する。</p> <p>イ かんきつ類</p> <p>(ア) かいよう病</p> <p>伝染源となる発病果や発病葉は早期に除去し被害の拡大を防ぐ。強風雨により発病が助長されるため、台風の前にはICボルドー66D 200倍液等を散布する。</p> <p>(イ) 黒点病</p> <p>ジマンダイセン水和剤 600倍液やペンコゼブ水和剤 600倍液等を前回散布後の30日以内または200～250 mmの降雨を目安に散布する。</p> <p>ウ 落葉果樹</p> <p>(ア) カキ炭疽病</p> <p>8月になると、果実では本病への感受性が高まり、降雨など発生を助長する要因が続くと、薬剤散布では十分に抑えることができなくなる。このため、予防散布、定期散布の防除</p>

項 目	作 業 内 容
	<p>を徹底するとともに、病斑のある枝は早期に除去する。薬剤防除では、オンリーワンフロアブル 2,000 倍液やトップジン M水和剤 1,500 倍液を散布する。</p> <p>(イ) フジコナカイガラムシ (かき)</p> <p>8 月は第 2 世代虫に対する防除適期にあたるため、必ず防除を行う。ヘタの周辺部や果実と葉の接触した部分、葉裏に寄生することから丁寧にモスピラン顆粒水溶剤 2,000 倍液等を散布する。</p>

(作成 果樹研究センター)